

## ★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

# 田口えつお



田口えつおさん  
自画像



石ノ森章太郎さんを訪ねて  
その場で先生の原稿の手伝いを

石ノ森章太郎さんが大好きでした。『テレビ

小僧』とか『さるとびエッチちゃん』をよく読んで  
いましたね。それまでは横山光輝さんの『伊賀の  
影丸』の影響で忍者漫画を描いていたりしたん  
ですが、石ノ森さんが「マンガ家入門」を出した  
んですよ。あれは本当にプロの漫画家をめざす  
ための本でしたから、漫画家になりたいという気  
持ちは強くなりましたし、石ノ森さんのことが  
ますます好きになりました。

プロフィール  
1948年、神奈川県生まれ。高校時代、石ノ森（石森）章太郎氏の  
仕事場に入入りする。大学入学後、「まんが王」（秋田書店）の『タケ  
ルちゃん』で商業誌デビュー。その後「別冊少年チャンピオン」で「ちゅ  
うちゅうマン」「みじめくん」などを発表する。大学卒業後、いくつ  
かの職歴を経て大手メーカーに入社。現在にいたる。妻と子供の5人  
家族。千葉県在住。

好きが高じて、石ノ森先生に会いに行きまし  
た。当時の漫画雑誌には作家の住所が載っていた  
んです。新宿のある先生の仕事場に突然訪ねて  
いきました。もちろん自分の描いた漫画を持って  
いきました。SFとギャグを1本ずつ。当時、永  
井豪さんがアシスタントで、あと女の人が一入  
りなんですけど、その人のことはよく覚えていない  
です。だけど、その人も永井さんもいい感じの人

だったので、さかんに遊びに行くようになったんですよ。

した。猫の手も借りたかったんでしよう。

当時、先生は自宅を新しく建てている最中だったと思います。それで新宿のアパートに部屋を二つ借りていて、一つは仕事場で、もう一つは寝室でした。最初に原稿を持っていった日に、寝室から先生がやってきて僕の原稿を見て、「ギャグよりSFの方がいい」と。まあお世辞だと思うんですけどね。でも大好きな先生にそう言われたわけですから、もう舞い上がっちゃって（笑）。そのとき、先生は『海賊王子』を描いていたんですけど、「ちよつと手伝わない？」と言われて。「いいんですか？」って（笑）。海の漫画だから、海の上に小舟が浮かんでいるコマがあったりして、斜線をたくさん引かないといけなくてね。それで斜線引きとベタ塗りを手伝いま

石ノ森先生は物静かな方でした。僕もあまり

喋るタイプじゃなかったし。あまり言葉を交わしたことはなかったですね。それでも覚えていのが、先生は仕事場近くに喫茶店を営んでいて、そこでペン入れをしていたことがあったんです。墨汁がこぼれテーブルや墨汁入れが汚れたとき、そばにあった雑中で「僕がきれいにします」と言ったことを覚えています。それくらいです。ほんと、先生に話しかけたのは。原稿は無事でした。

石ノ森先生のところに通ったのは半年ぐらいかな。アシスタントのまねごとができて、先生のお手伝いができるだけで幸せでした。でも、当時高校2年でしたから、3年になったときに、大学に行くか、それとも働くかという進路を決める

時期になったので、だんだん行かなくなりました。いちおう3年のときに、漫画とは全然関係ない会社に受かってはいたんですよ。でも、もし就職すると漫画が描けなくなると思ったので、やっぱり大学に行こうと。



商業誌デビューは「まんが王」  
描き直しゼロでいきなり掲載

その頃でしようか、「つれづれ草」の存在を知ったのは。手塚治虫さんの「COM」に同人誌の紹介記事があったんです。ほかにも同人誌が紹介されていたんですけど、「つれづれ」に惹かれたのは、いちばん漫画っぽかったからだと思います。あと新宅よしみつさんがメンバーだったのも「つれづれ」に参加したいと思った理由のひとつです。田舎から単身、東京に出てきて漫画家のアシスタントになった新宅さんは有名でした。

それで一度会いたいと思って、新宅さんのところに訪ねていったんです。住所がわかっていたので、連絡もしないで行ったんですけど、あいにく留守で。そのまま帰ればよかったですけど、せっかく来たので雰囲気だけでも味わいたいと思ったのです。彼のアパートの台所の上にある窓のカギがかかかっていなくて、ついそこから部屋の中に入っちゃったんですよ（笑）。もし大家さんに見つかったら、言い訳すればいいと思って。今考えると不法侵入ですね（笑）。そこに10分ほどいて、帰りました。新宅さんはそのことはもちろん知らないです。今初めて喋りましたから。もう時効だからいいと思って（笑）。あのときはプロの漫画家のアシスタントをやっている人に会いたい一心でしたから。新宅さんごめんなさい。

たくさん漫画は描いてはいましたけど、出版社に持って行く勇氣もなかったの、「つれづれ草」に載せてもらったのはいい思い出です。ある号で僕の特集が組まれたこともありました。「田口えつおSF特集」という号です。でも、今どこにあるかわからないなあ。メンバーの誰かのところに眠っているのでしょうか。

「つれづれ」の中心メンバーだった篠原（山下）幸雄さんが高円寺にアパートを借りたんです。そこは漫画家やカメラマンの卵、当時は全共闘運動が盛んでしたから、日大の学生とか。あと漫画雑誌の編集者といった人たちが出入りするたまり場になって、僕もそこに出入りしていました。「ゼロプロ」という名前でしたね。

そこで秋田書店でバイトをしていた漫画家志望の人と会って、その人に作品を見せたら、もつ

と描いてと言われたんです。そこで描いたのが『タケルちゃん』というギャグ漫画でした。それが運良く「まんが王」の編集者の目に止まって、掲載されたんです。それが僕の商業誌デビュー。大学生のときでした。

『タケルちゃん』は特に編集者と相談もせず、好きに描いたものだったんですが、そのまま載せてくれたんです。そのあと『ちゅうちゅうマン』を描いたんですが、それもあまり言われませんでしたね。人によつては編集者と何度も打ち合わせをして描くみたいですけど、僕の場合はそんなことはなかったですね。『タケルちゃん』も『ちゅうちゅうマン』もギャグです。漫画家にならんとしたら、ギャグの方が掲載されやすいのではと思っていました。

ゆかい歴史まんが



デビュー作「タケルちゃん」

自分の悪いクセなんですけど、ネームを描かないんですよ。原稿用紙を前にしてじーつと考え、頭の中で起承転結とかコマの大きさを決めて一気に描くんです。編集部を持って行った原稿はそのまま載せてくれましたし。それが自分のスタイルになっていたわけです。

デビューはしたんですけど、プロの漫画家とし



「ちゅちゅまん」「みじめくん」などギャグまんがを秋田書店の雑誌で発表

てやっついていこうという気はなかった。自分の作品が雑誌に載ったのはすごく嬉しかったんだけど、やっぱり自信がなかったのでしょう。掲載されるのも年に1回か2回ぐらいでしたからね。大学3年とか4年になった頃にはほとんど漫画を描くことはなくなりました。



ほぼ40年ぶりに原稿用紙に向かう  
身体が覚えていたペンの線

結局、就職活動をして社会人になりました。

最初は高円寺のスーパーマーケットです。本社は別のところにあつたんですけれど、なぜか「ゼロプロ」のあつた高円寺支店で（笑）。そこで1年ぐらい働いたんですけど、どうも合わなくてね。そのあと何社か勤めたんですけど、続かなくて。漫画をやりうと思つたんですけど、食べていける保証がなかったし、たまたま新聞に出ていた某メーカーの中途採用の募集を見て、受けたら運良く入れてくれたんです。

会社では途中で営業をやったり、大阪の支社に転勤したりしましたが、ほぼずっと総務畑

でやってきました。結婚は33歳のとき。職場結婚です。子供は3人います。いちばん上の娘は25なんですけど、まだ独身なのでジジババにはなっていない（笑）。

イラストはたまに描くことがあつたんです。会社の運動会のパンフレットを作ったときにカットを描いたり、野球やバレーボールのサークル募集のポスターを描いたりしてね。社内ではちよつと有名だったかな。ギャラは図書券でした（笑）。

「つれづれ草」が復活すると聞いて驚きましたけど、みなさん本気ですね。僕も参加させてもらっていますが、「まんが王」以来ですよ。値段がついているものに描いたのは（笑）。僕、23歳で漫画をやめたじゃないですか。今62歳なんですけど、いざ描こうと思つて、ペンに墨汁をつけ

て線を引いたら、すーっと描けたんですよ。覚えていたんですね、身体が。

ラリーマン哀愁シリーズ」という感じで。本当はそういう漫画が好きなんです。

ネームを描くようになったのは最近です（笑）。通勤途中の電車の中で描き始めました。高井研一郎先生の『総務部総務課山口六平太』つてあるでしょ。ああいうのを描きたいんです。ちよつとSFチックにありえない話にして、「サ

でも新しい「つれづれ草」では、ギャグっぽくしたほうが雑誌の性格に合うような気がします。ネームは描いていません（笑）。ぶっつけ本番です。最後はこういうオチにしたい、というのが前もってわかってしまうと飽きちゃうんですよ。だから次はどんな展開にしようかと思いつながら描きます。もし僕がプロになったら、編集者にここをこうしてくれ、と言われると嫌になっちゃうんじゃないかな。

家族は、僕が漫画を描いているのを見て、「またなんかやつてる」みたいな感じでにやにやしています（笑）。まあ別にいいですけど。



通勤電車の中で描き続けているネーム帳。小さなノートにアイデアがビッシリと描き込まれている。



池袋西口近くの石ノ森章太郎さんの墓。田口さんはアイデアにつまるところへ来るそうだ。

## ●インタビューを終えて

インタビューの前に、石ノ森章太郎さんのお墓参りに行きました。『サイボーグ009』や『仮面ライダー』『佐武と市捕物控』などが我々を迎えてくれました。2か月に1回はお墓参りに来るといふ田口さん。「どうか良いアイデアが浮かびますように、つてお参りするんです」と笑っていました。漫画の神様はきつと田口さんの願いを聞いているはず。「新つれづれ草」の、ちよつと不思議でおかしみのある作品が何よりの証拠ではないでしょうか。

文／中島泰司

2010年2月20日

池袋西口近くの喫茶店にて